

日本旧石器学会

ニュースレター 第53号
NEWS LETTER No. 53

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



一番古くて、新しい国宝、北海道白滝遺跡群出土品

瀬下 直人（遠軽町埋蔵文化財センター）

はじめに

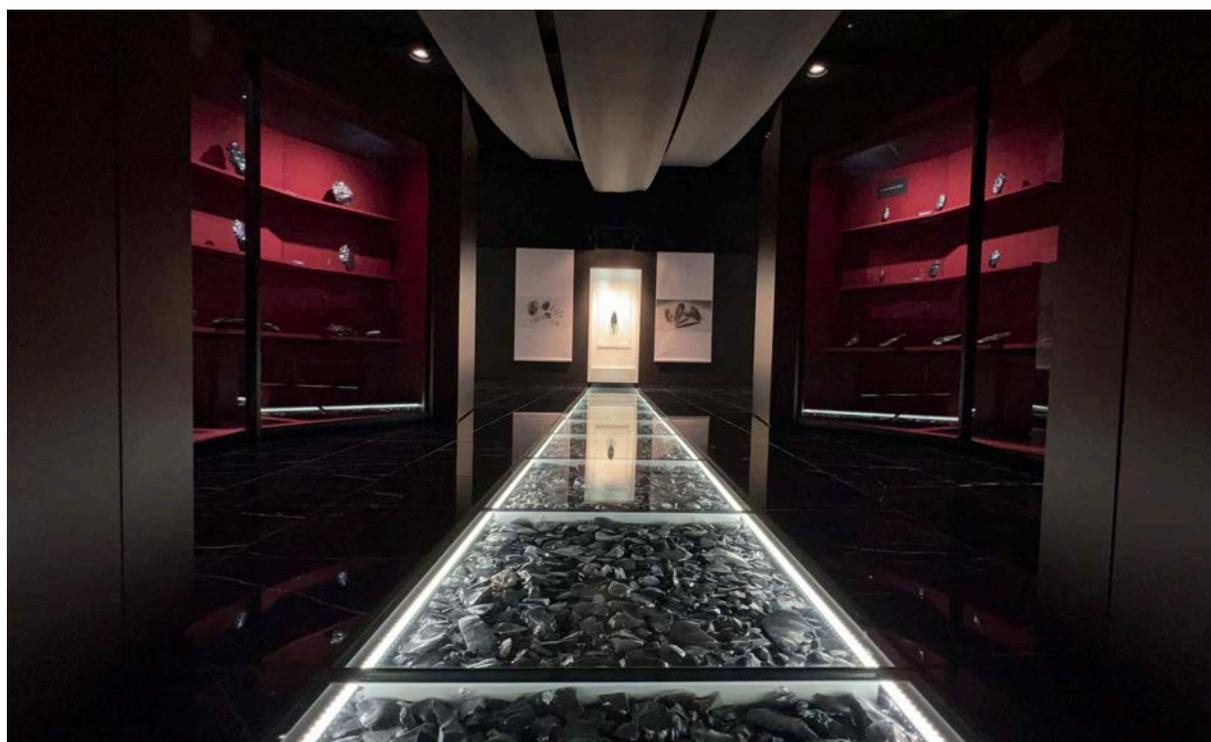
2022年11月、国の文化審議会は文部科学大臣に対し、遠軽町の重要文化財「北海道白滝遺跡群出土品」は国宝にふさわしいと答申した。この答申により、2011年の重要文化財指定時の1,858点から107点追加され、総数が1,965点となった。旧石器時代の文化財が国宝に指定されるのは今回が初、「日本最古の国宝」の誕生である。

官報告示をもって正式な指定となるため、正確にはまだ指定されていないという曖昧な状態ではあるが、答申以来多くの見学者が訪れている。また、東京国立博物館で開催された新指定国宝・重要文化財展では、多くの人々の目に止まり、大きな反響が

あったと聞いている。本稿は、その概要を紹介する。

1. 白滝遺跡群研究略史

本稿の指す「白滝遺跡群」とは、北海道遠軽町白滝（旧白滝村）に所在する遺跡の総称であることをはじめにご理解いただきたい。白滝には日本最大の埋蔵量といわれる黒曜石産地・赤石山があり、麓を流れる湧別川の河成段丘上には後期旧石器時代の石器製作遺跡が数多く所在する。その発見は、昭和初期の遠間栄治や松平義人による石器の収集に端を発する。



遠軽町埋蔵文化財センター・黒曜石ギャラリー

1954年の15号（洞爺丸）台風被害による幌加沢遺跡遠間地点の発見を契機に北海道大学や明治大学、白滝団体研究会、札幌大学による学術調査が実施された。1980年代以降は緊急発掘調査も増加し、1995～2008年に（財）北海道埋蔵文化財センターと白滝村教育委員会による一般国道450号（旭川紋別自動車道）の建設に伴う大規模な発掘調査が行われた。

これまでの調査成果から、白滝遺跡群は原産地遺跡という特性を持ち、原石の搬入、加工、使用、搬出といった一連のプロセスが理解できる遺跡として

旧石器時代の研究においてきわめて重要であることを証明した。

このような学術的価値や学史的意義からも1989年には白滝遺跡（白滝第13地点遺跡）が国史跡の指定を受け、1997年には上白滝8、奥白滝1・11・12、服部台、服部台2遺跡の追加指定に伴い名称を「白滝遺跡群」に変更している。また、2011年に6遺跡（服部台2、奥白滝1、上白滝2・5・7・8遺跡）の石器が、重要文化財「北海道白滝遺跡群出土品」に指定された。今回の答申によって新たに旧白滝15遺跡の石器が追加され、現在に至る。



八号沢黒曜石露頭（遠軽町白滝・赤石山）

2. 北海道白滝遺跡群出土品の概要

本件は大きく分けて11の石器群で構成されている。その内訳は、

- ・小型剥片石器群
- ・広郷尖頭状石器群（ナイフ形石器）
- ・大形尖頭器石器群
- ・細石刃石器群（広郷型）
- ・細石刃石器群（峠下型）
- ・細石刃石器群（札滑型）
- ・細石刃石器群（紅葉山型）
- ・小形舟底形石器群

- ・有舌尖頭器石器群
- ・ホロカ型彫器石器群【新】
- ・細石刃石器群（蘭越型）【新】

石器製作の工程がよくわかる接合資料や、種類の豊富、他に類を見ないサイズの石器が特徴的である。北海道の旧石器時代に見られる石器群が網羅され、学術的に貴重である、これが国宝にふさわしいとされた大きな理由となっている。



①北海道白滝遺跡群出土品の主要な石器



②細石刃石器群
(上段左から広郷型, 札滑型, 下段左から 蘭越型, 紅葉山型, 峠下型)



③ホロカ型彫器石器群 (1) 石刃, 彫器
(中央の石刃は49.5cm)



④ホロカ型彫器石器群 (2) 石刃製作の接合資料



⑥大形尖頭器石器群 (中央の尖頭器は36.3cm)

※石器及び接合資料の写真は全て佐藤雅彦氏(写真事務所 クリーク)の撮影



⑤尖頭器製作の接合資料 (白色は想定復元資料)

3. おわりに

今回の答申を受け、指定に係る業務を担当した筆者としては、当初の計画から大幅に遅れが生じたが、コロナ禍に明るいニュースを届けられたという点では喜ばしいことであり、まずは一安心といった心境である。ただ、これは新たなスタート地点であり、取り組むべき課題は山積している。

例えば、国宝というフレーズは人を惹きつける効果が絶大であることを思い知らされた。では、そうではない他の文化財はどうだろうか？ 国宝でなければ価値がないという訳ではなく、等しく大切に、後世に残していかなければならないものと筆者は考えている。遠軽町埋蔵文化財センターには、北海道指定有形文化財である幌加川遺跡出土の石器群(遠間コレクション)や指定品ではないが、膨大な数の資料が収蔵・展示されている。国宝を通じて、これらの文化財にもスポットが当たるよう、普及活用に努めたい。

最後に、ここまでたどり着いたのは、国、北海道、町や関係団体などの多大な協力によるものである。同時に、旧石器時代の研究及び白滝遺跡群の調査に関わり、評価される下地を作り、支えていただいた研究者、関係者の貢献も忘れてはいけない。この場を借りて、改めて感謝申し上げます。

2023年度 日本旧石器学会第21回 総会・研究発表・シンポジウムについて

2023年6月24日（土）・25日（日）に東京都立埋蔵文化財調査センターにおいて、下記のとおり、日本旧石器学会第21回総会・研究発表・シンポジウムを開催します。

25日（日）に開催するシンポジウムのテーマは、「更新世における海とヒトのかかわり」です。更新世の段階における西太平洋沿岸諸地域での人類の海洋進出と海洋資源利用は、人類の拡散と適応の多様性を探求するのにあたって、ますます注目を集める問題となっています。本シンポジウムでは、この問題に取り組んでこられた方々に最新の研究成果をご報告いただき、議論を深める機会にしていきたいと考えます。

一般研究発表・ポスターセッションの発表者・題目については、学会ホームページでご案内いたします。

2023年6月24日（土）

会場：東京都立埋蔵文化財調査センター

（東京都多摩市落合一丁目14番2）

総会・研究発表会場：東京都立埋蔵文化財調査センター会議室

○総会（13：00～14：00）

*12：00受付開始

○学会賞授賞式（14：00～14：10）

○一般研究発表（14：20～16：30）

*一件20分（質疑込み、休憩10分）

○懇親会は今回予定しておりません。

2023年6月25日（日）

シンポジウム会場：東京都立埋蔵文化財調査センター会議室

ポスター会場：東京都立埋蔵文化財調査センター実習室

○シンポジウム『更新世における海とヒトのかかわり』（9：30～12：10）

*9：15受付開始

・研究企画委員「趣旨説明」

・海部陽介「更新世の海洋進出にともなう海洋環境と技術・社会的背景の考察」

・池谷信之「更新世における黒潮の流路と神津島産黒曜石の獲得」

・澤田純明「後期更新世における人類の動物資源利用：ホアビニアンと日本列島」

・藤田祐樹「海洋を渡った旧石器人：琉球列島の事例から」

・小野林太郎「海洋を渡った旧石器人：ウォーレシアの事例から」

*一件30分（質疑込み）

<昼食休憩 12：10～14：00>

○ポスターセッション・コアタイム（13：00～14：00）

*ポスターは25日の受付後に掲示（24日はポスター掲示できません。）

○パネルディスカッション（14：00～15：00）

シンポジウム報告者全員，司会（研究企画委員）

○講評（15：00～15：10）

○若手奨励賞発表・閉会（15：10～15：30）

会場案内

東京都立埋蔵文化財調査センター

（東京都多摩市落合一丁目14番2）

・京王相模原線「京王多摩センター駅」

東口徒歩約5分

・小田急多摩線「小田急多摩センター駅」

東口徒歩約5分

・多摩モノレール「多摩センター駅」

徒歩約7分

(<https://www.tef.or.jp/maibun/access.html>)

宿泊

宿泊の斡旋はいたしませんので、各自でご手配ください。

参加申込

同封のハガキに必要事項をご記入の上、**6月4日（必着）**までにご投函ください。また、やむをえず総会を欠席される場合は、同ハガキ下段に記載された委任状にご記入・ご捺印の上、ご返送くださいますようお願い申し上げます。会則第5条により、全会員の5分の1以上の出席（委任状を含む）をもって総会が成立します。

研究グループ活動報告

郡家今城遺跡再整理グループ

グループの作業目的はこれまで通り、1) 礫群の実態把握、2) 石器群の個体別資料レベルでの把握、3) 礫・石器の悉皆台帳・遺物番号付き分布図の作成、であった。2022年度の作業として、9月までにこの目標の達成を企図していたが完成に至らず、10月以降いまだその落ち穂拾いをしているところである。そのため、まだ全体像の把握作業段階には至っていない。

再整理作業結果については、2023年度内の報告書刊行を前提に、予算要求を済ませており、現在データの落ち穂拾いの傍ら、報告書記載に向けて、集計、作図、撮影作業を並行して実施している。

既報告は遺跡全体の俯瞰的記載に終始しているため、これを補完する意味で、A~Hの大別7群、細別19群毎に、礫群・石器群の記載をすすめ、標準的な報告書の形での執筆をすすめる方向で準備している。

1) 礫群の実態

ニュースレター第47号記載内容とほぼ同様であるので数字の詳細は省略する。礫から石器への分類変更などがあり、最終的な数字には若干の変更がある。現在、接合関係の整理に努めているところであり、礫群間関係の全体把握には至っていない。

2) 石器群の個体識別結果

A~H群について、群内及び群間接合作業を実施してきた。その結果、碎片類を除いて、これまで、暫定的に83個体を識別した。各個体は接合資料と非接合資料から成るが、1978年報告時点の接合例のほかに、新たに36個体の接合例を加えることができた。礫群同様に、石器ブロック間関係の全体把握には至っていない。

礫群・石器ブロックに関するA~Hの大別7群が一つの集落を構成するのか、あるいは複数の居住地ユニットに分かれるのか、未だ見通しは立っておらず、報告書原稿の執筆を行いつつ、整理、検討することになる。(鈴木忠司)

出版情報

新刊紹介

長沼 孝・寺崎 康史 著

『シリーズ「遺跡を学ぶ」159 氷河期の大石器工房 ピリカ遺跡』

目次

- 第1章 「ピリカ」のドラマ
- 第2章 旧石器人のドラマを求めて
- 第3章 装身具の発見
- 第4章 北海道とピリカ遺跡
- 第5章 保存と活用



「新泉社の遺跡を学ぶシリーズにどうしてピリカ遺跡がないのですか。」

ピリカ遺跡に隣接するガイダンス施設ピリカ旧石器文化館の来館者から寄せられたこうした問いは、実は一つや二つではきかない。1遺跡1冊の形式で豊富なカラー写真と図版を使い、平易な文章で遺跡の魅力を伝える本シリーズは刊行開始から20年近くが経ち、当館でもそんな声が聞かれるようになっていた。シリーズ159冊目として登場した本書は、その意味で待ちに待った新刊と言えるだろう。

著者の一人長沼孝さんは、当時北海道埋蔵文化財センターで本遺跡の発掘を担当した調査員であり、膨大な出土資料を手際よく整理され、遺跡の規模に全く釣り合わないわずかな期間で調査報告書をまとめ上げられた。もう一人の寺崎康史さんは町教委にあってその後の範囲確認調査や史跡整備を担当された職員であり、また北海道旧石器文化全般について造詣が深い。この二人の共著により、調査から保存・整備、そして遺跡の歴史的意義に関わる包括的な解説書が出版された。

本書前半では、遺跡発見の端緒から発掘調査、整理作業までのいきさつが興味深い逸話とともに語られ、読者を考古学の魅力に強く惹きつけている。後半では、北海道内でのピリカ遺跡の位置付けや出土品の年代的な評価等について、近年の調査成果をふまえた新見解も付加されている。本遺跡を特徴づけるキーワードを上げてみると、細石刃、尖頭器、大型石器、接合資料、装身具、北東アジア、焚火跡、

層位的出土、頁岩、メノウ、黒曜石などと多岐にわたり、旧石器人の生活に関する内容が極めて豊富なのが理解されよう。

先述の長沼さんによる調査報告書『今金町 美利河1遺跡』は400頁にも及ぶ大変な労作であるが、他の多くの例と同様すでに入手困難となって久しい。本書巻末にある戸沢充則さんの言葉「刊行部数が少なく、数があっても高価なその報告書を手にとることすら、ほとんど困難」なのは、この遺跡にもぴったり当てはまる。本書はピリカ遺跡の全容を手軽に知ることができるだけでなく、考古学を学ぶ一般の社会人や学生にとっても好適な入門書としてお薦めできる一冊である。

新泉社 2022年12月10日刊 96頁 1700円+税
(今金町教育委員会 宮本雅通)

関連学会情報

学会紹介 石器文化研究会

石器文化研究会は、1985年に関東地方の大学教員、自治体の文化財担当職員、発掘調査組織の職員などを中心に結成された。5回のシンポジウム、19回の石器文化研究交流会を開催し、会誌『石器文化研究』を21号まで刊行した。この間、会員の発表などによる例会はほぼ毎月開催され通算285回を数えるに至った。その目標は、関東地方を中心とした旧石器時代編年・地域性の解明にあり、さらに列島各地との対比を視野に入れたものでもあった。地域研究会としての一面だけでなく、地域の垣根を超えた研究会を標榜する意味を込めて研究会の名前に地域名も「日本」も付いていない。

この間会員は最盛期に100名を超え、例会には常時20名から30名が出席していた。しかし、2010年頃から例会の開催が隔月さらに年三回と減り、出席者も10名を切ることも。明らかに活動は停滞していった。

停滞の要因として内部の状況を別にすれば、第一に前・中期旧石器捏造事件の影響である。それによって旧石器時代研究を志す学生が減少した。第二に情報共有環境の変化である。情報技術の発達により研究会で情報を入手する必要があまりなくなり、一方コンプライアンスの関係からか未報告資料に触れることもしにくくなった。第三に日本旧石器学会の発足、科学研究費などの研究プロジェクトの増加である。各地の地域研究会しかなかった時代に比べ、研究参加の機会は多様化した。

そして最後は第三の問題と根は同じであるが、研究趨勢の変化である。実験痕跡研究、遺跡形成論、測量・計測技術など分析科学が学界の潮流となり、一方編年研究は広範囲高精度年代測定と大陸を視野に入れたグローバルなものになった。「石器文化」という概念自体あまり使われなくなった。私も使用しない。文化財保護、発掘調査に携わる「自治体・調査組織職員」は国際化の波に乗らず、地域に埋没していった。大方の編年が確立され発掘調査資料の位置づけが容易になった関東地方にあっては、特に新たな地域相解明への取り組みも低調になったとも言える。

こうした退勢の中で研究会は2018年に会費制をやめ、石器文化研究交流会と会誌発行を休止。以後遺跡発掘調査、石器資料の見学を年数回実施した。そして、2020年のコロナ禍によって活動は停止した。

今、自粛期間が終了し2022年末から活動再開。代表世話人である砂田佳弘氏、諏訪順氏と伊藤三名が中心となって以前のような活動に戻すべく実績を重ねている。2022年12月3日に白石浩之氏の講演「旧石器時代終末から縄文草創期の有舌尖頭器の盛衰とその集団」、2023年1月28日と3月11日に神奈川県内の旧石器時代遺跡発掘調査・石器見学、4月22日には伊藤の発表「武蔵野編年の再確認」を実施した。毎回20名前後の参加、この先も6月と7月の開催が決まっている。

今後の活動としては、私案ながら以下のことを考えている。参加メンバーに関東地方の自治体・調査組織職員が多いことを踏まえ、地域研究会として関東地方の地域相の解明を進めていく。関東地方の編年は一応の完成を見せたものの、すでにその編年の構築から40～50年を経過していくつもの問題点も指摘されている。その問題点に対し、この間の資料の蓄積そして新たな見方も生まれ、再構築することができるようになった。最新の資料に触れ続けているメンバーだからこそである。今こそ列島編年を意識することなく、じっくりと地域編年に取り組む機会である。かように、関東地方編年を見直し再構築し地域相を明らかにすることを主な目標にして、様々な研究発表、発掘調査現場の見学、博物館等での既報資料の再検討を企画していくつもりである。もちろん関東在住以外のメンバーもいて興味は多岐に渡るので、それに限らず各自の研究に沿った様々な発表も行っていきたい。

とはいえ、現在の参加者は学生から70代まで幅広いものの、その多くが60歳台。全盛期と同じ

メンバーが中心である。「若手」即ち60歳未満の方々の参加をお願いします。参加費無料。コロナ後は再び「つながり」の時代である。

研究会ホームページ：www.sekki.jp（伊藤 健）



石器文化研究会2022年12月3日例会
白石浩之氏の講演

APA11の開催について

第11回アジア旧石器協会韓国大会（APA）が、2023年8月18～22日（大会は19～20日、エキスカッションは21日）に開催されることとなりました。詳しくはHPを御覧ください。

お知らせ

メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものですが、これまでその登録についてはあくまで任意のお願いというものでした。

一方、新型コロナウイルス感染拡大にともない、各種学会行事の変更などがこれまで以上に増加することが予想され、学会と会員、そして会員間でのより迅速な情報共有が喫緊の課題となっています。その解決のためには、メーリングリストの更なる有効活用と登録率の向上が必要であることから、このたび役員会での議論と了承のもと、メーリングリストへの登録を原則として義務化することにいたしました。ご理解を賜れば幸いです。

まだメーリングリストへの登録のお済みでない方は、携帯電話のメールアドレスでも構いませんので、事務局のメールアドレス（jimu@palaeolithic.jp）までお知らせください。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。ニュースレター同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。これまでもお知らせしておりますとおり、2018年度より年会費が6,000円になりました。御理解のほどよろしくをお願いします。

また、会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、同封の会費納入状況を御確認のうえ、2022年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード（<http://palaeolithic.jp/join.htm>）し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。方は、携帯電話のメールアドレスでも構いませんので、事務局のメールアドレス（jimu@palaeolithic.jp）までお知らせください。

日本旧石器学会ニュースレター 第53号

2023年5月8日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

赤井文人・仲田大人・山田和史

発行：日本旧石器学会

事務局：〒162-8644

東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部 長崎潤一研究室気付

日本旧石器学会事務局 あて

E-mail：jimu@palaeolithic.jp

HP：<http://palaeolithic.jp/index.htm>